路地への迷宮

最近趣味は何ですか？と質問されたら迷わず**散歩！**と答えてしまうくらい散歩をするようになった。以前は散歩というものがあまり好きではなく、目的もなくただぶらぶら歩くという行為が苦手であった。しかし、そこはもう**大人**。アラサーにでもなれば趣味のひとつやふたつ…などという理由で散歩にはまったわけではなく、**暇だったのと、お金がなかったのと、運動不足だったから**、という必要にせまられた感じの理由だった。散歩の一番の利点は**金がかからない**、ということだと思う。金をかけずにいかに有意義な時間を過ごすことができるか、そこにかかっている。しかし散歩といっても具体的に何をすればいいのか。私はその第一歩からつまずきとりあえず毎日駅までの道（約２０分）を行ったり来たりし始めた。**持て余す時間をできるかぎり消費**するために無駄にゆっくり歩いてその日の空の色や葉の色などを観察した。しかし、数日経つと飽きた。刺激を求めいつも通っている道をそれて、気分の赴くままに歩みを進めるようになった。ここからが**散歩マジック**である。楽しい、なんだこの楽しさは。私が一番魅力を感じたのが**路地**である。大通りは何度も通っていると見慣れた風景ばかりで飽きてしまうが、一歩裏道に入りぐんぐんと進んでいくと入り組んだ住宅と住宅の隙間に走る何本もの路地に好奇心がそそられる。何度通っても**道に迷っているような**新鮮さがあった。急な坂道や狭く長い路地、行き止まりの奥にある駐車場、誰も使わなくなった公園…**なぜ私は路地に魅了されたのだろう**。ふと考えてみる。住宅街というのは集団の集まりであり、そこには土地独特の空気感みたいなものが存在する。**人々の暮らしに染みこんだ空気**。そこへ自分という異物が踏み込んでいく緊張感。路地には、普段感じることのない**別次元の何か**が潜んでいるのかもしれ

ない。先が見えない路地のその奥には**どのような景色が広がっているのだろう**、なんて好奇心から進んでいくと、知らないお宅の庭に出てしまったなんてことがよくあるので注意が必要だが、踏み込んでいくと思わぬ場所に出たりして楽しい。近所を散歩していると自分の家の近くに出てしまうことがたまにあるのだが、いつもと違った風景に見えるのが**錯覚**のようで不思議だ。道は時に見る視点や空気、季節によって**印象をがらりと変える**。

世の中には団地マニアや重機マニア、鉄道マニアなど、マニアと呼ばれる人達がたくさんいるが、私が感じているこの楽しさは、その人達が感じるそれに似ているのだろうか？**マニア的な目線**で路地を見ていくと、自分にも好みがあることがわかる。**生活感があるのに殺伐としていて逆に生活感がなくっている**、という光景が好きだ。なんか異常に興奮してしまう。そういった場所に出くわすと思わず立ち止まりカメラのシャッターを切りたくなってしまう。庭やベランダに放置された粗大ゴミや乗り捨てられてそのままになっている自転車など、広い通りではなかなか見ることのできない**カオス地帯**（おそらく人通りが少ないか、近所の人以外通る人があまりいないのだろう）が点在している。それらから人々の生活の気配は感じられるものの、その**周辺に流れるオーラ**というものは独特なものがあり、それが当たり前に受け入れられてそこに馴染んでいることの**面白さ**、**独特さ**、**そこに自分がいる奇妙さ**、みたいなものが一緒くたになって私を夢中にさせているのかもしれない。

どこにでもありそうだけど、ここにしかないような、**この世から切り離されて**しまっているような、そんな風景を自分の視点から見るというのは**贅沢**なことだと思う。

路地散歩には他にもいくつか楽しめる**ポイント**がある。別に私のように少しマニアックなものに反応できなくても、家や団地、アパートを見ていくだけでも多種多様で楽しい。

築何十年なのだろう、というような味のあるお宅や、奇抜な塗装のお宅、隠れ家のようなどこからどこまでが家なんだろう、というようなお宅。お屋敷のようなお宅。**一体どんな人が暮らしているのやら**、と想像するのもまたいい。その地域の神社やお地蔵さんにお祈りをするのもいいし、野良猫と静かな会話を楽しむのもいいし、隠れ家的なお店を発見して突撃してみるのも面白い。**一度楽しみ方を覚えてしまえば**、あとは晴れてさえいれば何も予定を決めずに持ち物はなるべく少なく、身体の赴くまま進んでみれば**予想以上に素晴らしい日**になったりするかもしれない。（保証はしません）

ただし、いくつか**注意点**があります。先に述べたように散歩好きが度を超してくると、知らない道から道へ入っていく内にかなりの確立で他人の敷地内に進入していることがよくあります。その場合気づいた時点で速やかに来た道を戻りましょう。万が一住人に見つかった場合、**結構やばいシチュエーション**になってしまいます。あとは、カメラをぶら下げる、または手に持って散歩する方。ただでさえ近所の人しかほとんど通らないような道なのに、そこに部外者がうろついているだけでなく手にカメラを持っていると**怪しさがさらに増します**。写真を撮る時はできるだけ人のいないところで、表札やポストなどプライバシーの侵害になるものは写らないように気をつけながら撮りましょう。（私のように一眼レフなど大きいカメラを持っていると目立つので余計怪しい雰囲気になる）**警察を呼ばれないくらいの立ち位置**で住宅などは観察するようにしてください。けっこう昼間は庭の手入れや犬の散歩などお年寄りが外に出ています。地元の人に余所から来たことを伝え仲良くなる手法もあるけれど（地井散歩的な）、私は誰にも気づかれずに**一人でひっそり**と散歩するのが好きなのでなるべく住人の方が往来している時は写真を撮らないように気をつけています。

これくらいのことを気をつけていれば大抵大丈夫。近所でいいから**ふらふら**してみて欲しい。道から道へ、路地を通り**知らない街へ**。自分の中にある価値観や既視感を一掃してくれるような空気に出会うと、ひりひりした心の奥が一瞬ゆるんでいくのを感じる。見てきたもの、聴いてきたもの、好きなもの、それらも大事だけれど、街を歩き、**見たことのない景色をつぎつぎと自分の中に取り込む行為**は自分を多角的に見る行為に似ていると思う。そう思うと街は人なのかもしれない、とふと思った。